

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年 九月 六日 横浜定例講演会より

『大神様のご存在 (二)』

十字と 今日、「神の何たるか」という本を出すためにお話ししているのですが、難しいでしょうか。でも出来るだけ解って

いただきたいと思えます。

いわゆる『十字の教え』としての『十』、これは何度も出て参ります。「火」と「水」で、『カミ||神』です。『カミ』。ここへ「土」を加えると、今度はヒミツです。土を加えると、『ヒミツ』と読むのです。私達の体は「火と水と土」で出来ているからです。だから、「人の世を終わつた時には、肉体を土に返さないと、神の世界に戻れないよ」という意味です。「肉体を土に返さないと、土に返すとまた神の世界に戻るよ。しかし肉体がある」とヒミツですから、土が重くてあの世に還ることが出来ない。神の世界には戻れませんよ」ということです。

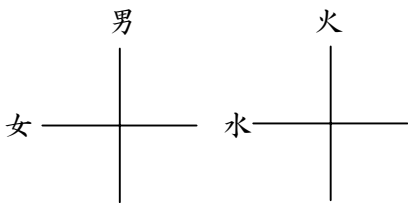
この神である十字をほどく、この「ホドケ」から後事を「仏」に託したのです。この十字を解いて、これから仏に後を託すこと

になったのです。仏教はインドの国に興つたけれども、大乘仏教・小乗仏教共に陸路と海路で日本へ日本へとやってきたのは何故か。それはこのほどけの後を託す為にということだったので。

だから、仏教では「三千世界」と言ったり、「三千^{みちとせ}年の間」と言っているのです。予定したのは三千年ですが、実際にお戻りになられたのは約二千五百年です。五百年ほど予定より早く帰って来られました。本当はあと五百年近く先に帰る予定だったのですけれども、地球が余りにも汚れ過ぎています。人の心も魂も汚れ過ぎています。これでは駄目だ。神の子としての意味がなくなるというので、大神様の方は大急ぎで帰って来られたのです。神様の方が予定より早く帰って来られたのです。

大神様の方は火の系統、いわゆる縦の神様です。縦が男性、横

火の系統の神様って何でしょうか？



この十字で見られるように男性の神様のことです。

しかし、大國主神様などは宇宙へはお出かけになっておられませんので、天津神様の中の男性の神様ということになります。国津神様・出雲系統の神様は、それぞれその土地を護っておられました。

が女性です。それぞれ書いていけばよく分かります。縦が山で横が海。これが太陽の日でこちらが月。そうすると「女性には月ものがあるよ」とこうなるのです。この解いた縦の閨関係の神様は大宇宙に御用があつてお出かけになられたのです。

天 岩 戸 伝 説 に 秘 め た こ と

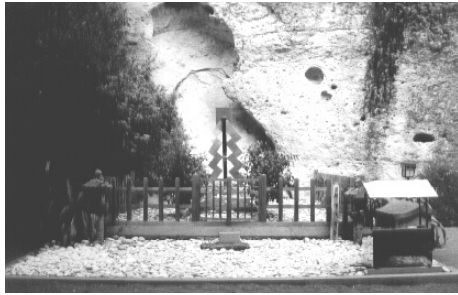
熊野にある花の窟という所に、伊弉冉神様と火具土神様を祀っていますけれども、私達の世界では、伊弉冉の神様が火の神様である火具土神様をお産みになった時、火でもつてそのお母様である伊弉冉神様の産道を焼いてお母さんが亡くなったのだというふうに言われているわけです。

実際にはそうではなく、産まれて間もない子供さんなのに「自分は火の神である。従って縦の火の神様は全部大宇宙へ行くとい

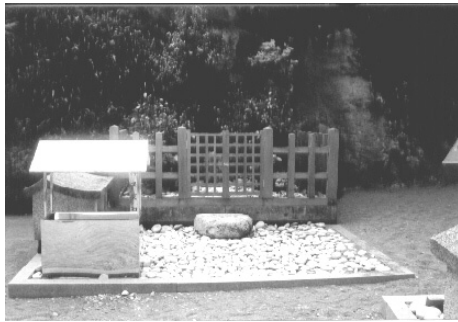
花の窟神社

社殿はなく「花の窟」そのものをご神体として下の様にお祀りしています

伊弉冉尊神様を祀る壇



火具土神様を祀る壇



うことですから、僕は小さくても行くんだ」と言つて出掛けてしまったのです。

お父さん、お母さんはそれを嘆いたのです。それでそういう小さい子供であっても大宇宙へ一緒に連れて行つたというので、大様が「伊弉諾・伊弉冉が嘆いているから、それならば三貴神を与えよう」というので、天照大御神様・須佐之男神様・月読神様のお三方をお授け下さつたのです。こういった所が物語では全然隠されているから、さっぱり分からない事になっているのです。

大宇宙へお出掛けになられたのは、皆さんは一回ぼっきりだと思つてしまふ。しかし、第一次、第二次、第三次、南極観測隊ではないけれど、何回かに分かれて大宇宙へ次々とお出かけになっているのです。

やがて授けて頂いた尊い天照大御神様も出かけて行く事になるのです。それが天岩戸の物語です。霊の元つ国と言われる日本の束ねとしての天照大御神様が、大宇宙へ出かけて行つて留守になったら偉いことです。それに縦系統の、火の系統の神様は全くいない、女性ばかりだよという事になると、悪い者がはびこつて来るわけです。この事を包み隠して、そうならないように防いでいたのです。そして束ねとしての天照大御神様が再び天岩戸からお出ましになったという形を取つたけれども、天照大御神様は女性の神様だという形を取つたわけです。

本来は男性の神様です。十二名のお妃様がいらっしやいます。一月ずつというふうに見てもいいし、東西南北を三人ずつでお守りするという形で見られてもいいし、春夏秋冬を三人ずつで担当されると捉えてもよいし、とにかくお役目として十二名のお妃様がいらっしやるのです。お名前も解っております。

瀬織津比売様とか、速開津比売様という方は、中臣の大袂の祝詞の中に「佐久那太理に落ち多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比売と言ふ神」とあり、「荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開津比売と言ふ神」というふうに出て参ります。お二人ともお妃様でいらっしやるわけです。

そうして天照大御神様と瀬織津比売様との間に五人の男性がお生まれになりました。ご長男の方が天之忍穂耳神様というお方で、その方のお子様も邇邇岐命様という事になるわけです。そういう事で天照大御神様も大宇宙へお出かけになられたのです。実際にお出かけになられたのは女性の神様という事になっているから、戸から出て来られたのは女性の神様という事になっているから、一般には天照大御神様は女性だと思われているのです。

しかし実際には男性の神様でいらっしやって、十二名のお妃様がいらっしやるのです。そして十二名のお妃様のうち、瀬織津比売様が正妻としていわゆる五人のお子様をお産みになられて、どこにいらっしやったかという点、大体が伊雑の宮、今の伊勢神宮の別宮にいらっしやったのです。その伊雑の宮においていわゆる今でいうイナゴの大群が押し寄せてきた時に、瀬織津比売様を始

め大勢の女の神々様がそこで祝詞を上げて「這う虫の袂い」ということ
でイナゴを追っ払ったという物語があるし、その伊雑の宮において、御殿の中に上がられるのは男性だけということで、男性の事

天照大御神様の十二后

